

第2部

補論：社会・ジェンダー調査とPDM/PCMへの反映

第1部において、定量的データと定性的データの双方の重要性を示してきた。第2部では、社会・ジェンダー調査の方法について記述しようと考えている。定性的なデータを社会・ジェンダー調査により収集するという事は、フィールド調査を実施するということを意味する。フィールド調査を実施する水準は、第1部でも論じてきたようにマクロレベル（政府関係者など）からメゾレベル（地方行政担当官）、ミクロレベル（対象地域の住民、裨益者層）まで多様であろう。しかし、1990年代以降の開発の潮流は、対象地域の人々を主体にした開発であり、住民参加型開発²²⁷である。つまり、最も望ましいのは対象地域の住民の意見、もしくは最も裨益者になると想定される人々の現状や利害関心を把握する必要がある。しかし、フィールド調査は「職人芸」と表現されるように、慣れや経験が必要である。また、客観性を証明するために同じ事象を多様な方法で調査するトライアングレーションなどを行う必要がある。これらにジェンダー視点を加えるなど、一体、何をどのように加えればよいのだろうか、と立ち止まる方もいるに違いない。さらに、これらのデータをジェンダー視点から解釈し、プロジェクトのPDM/PCMに反映させる必要がある。それにはどのような工夫が求められているのであろうか。

ここでは厳密なマニュアルを作成するわけではない。なぜならば、調査対象地域の人々や、裨益者と想定される人は多様であり、当然、地域や国も異なる。また、調査者である専門家やJOCV、調査団、コンサルタントなどの目的や専門性も異なる。加えて、一人で調査地に入る場合、複数で入る場合、数時間から数日で終わる調査、数週間から数ヶ月間調査に費やすことが可能な場合と状況は千差万別であり、マニュアルさえあればうまくいくというものでもない。また、ジェンダー調査ではなくとも、フィールド調査はそもそも対象社会の状況に合わせて臨機応変にそして柔軟に対応することが求められる。しかし、以下に示す基本的な事項を社会・ジェンダーの視点から調査することは「職人芸」ではなくてもできる。このような調査を手始めに行うことで、統計には表れない定性・定量的データを入手することが可能となり、また、これらの調査過程を踏む中で対象社会のジェンダーの諸状況が浮き彫りにされる情報の入手が可能となるはずである。このようにして得られたデータを元に対象社会のジェンダーの諸構造を住民（/裨益者）とともに解釈することで住民を主体にしたジェンダーの諸状況に目配りをした、もしくはジェンダーを主流化したプロジェクト計画立案が可能となる。また、ジェンダーの問題を適切に解釈することで（しばしば予期せぬ副産物と見なされるものであるが）第3章や第4章でも明らかになったように、対象地域の人々のエンパワーメントやプロジェクトの持続可能性にもつながるプロジェクトの実施が可能となる。対象地域の人々のエンパワーメントと同時にプロジェクトの効率性が問われる今日、社会・ジェンダー調査はプロジェクトに多様な意義をもたらすであろう。

²²⁷ 参加型開発は言説であるという批判もある。また、対象地域の人々の参加のあり方は多様である。藤掛洋子（2002c）も参照されたい。

6 . 定量的データに加えてなぜ定性的データが必要なのか

JICA事業の評価は、「プロジェクトなどの妥当性や価値をできるだけ科学的かつ客観的に、事前、中間、終了時、事後の段階において判断する作業である」²²⁸という。しかし、ここでいうところの「客観的」とは何を意味するのであろうか。本稿の「はじめに」でも述べたように、実証主義的な分析（数式や数量化されたものには客観性があるという立場）の限界が指摘されており、特に1960年代以降、「客観的」だと思われてきた数値・数量の客観性に対して、疑問が提示されてきた。本稿では、対象社会を解釈するためには、定量的なデータとともに、定性的なデータを入手し、それらを定量化したり、可視化したり、仮説を提示したりすることから解釈する必要性を示してきた。当然、プロジェクトの内容や規模などによっては、定量的なデータが重視される場合もあるだろう。反対に、定性的データを重視しないとプロジェクトの立案すらできない案件もあるだろう。しかし、今日の開発協力を求められているものが、多様な状況下にある人々（女性／男性）のエンパワーメントであるならば、対象社会の人々の間に見られる力の不均衡を把握し、それらを是正するための支援を行い、その支援の結果発現した質的な側面である社会事象を適切に評価する必要があるだろう。本稿の第3章と第4章でも確認してきたように、対象社会の人々（女性／男性）のエンパワーメントをプロジェクト目標に設定していないプロジェクトでも、プロジェクトの実施後、対象社会において多様な変容が起きている。それらは、第4章で詳細に論じてきたように、まず実際の利害関心の認知と充足の過程を経て、戦略的利害関心の認知と充足に至っている。戦略的利害関心（例：家族計画のタブー、FGMなど）にかかわる支援については、「対象社会の文化であり外部者がかかわるものではない」といった文化相対主義の立場が往々にしてとられてきたが、本稿の第4章や藤掛洋子（2003）においても示されているように、対象社会の人々は形作られてきた文化を自己の文脈の中に取り込み、異化させ、日常の抵抗実践を行っていた。例えばそれは、「神の意思には背くかもしれないが、神は子供を養ってはくれないので家族計画を実施するのだ」という対抗言説の構築であったり、女性から男性への家庭内暴力の拒否であったり、通報であったり、男性の領域であった村の行政組織（農協など）への女性の参画であったりする（図4-1も参照されたい）。また、このような対象社会における人々の意識変容のプロセスは第4章でも明らかになったようにプロジェクトの持続可能性には不可欠なものである。開発協力が人々のエンパワーメントを目指すならば、人々のこのような意識や行動変容の側面をプラス面もマイナス面もとらえ、評価するとともに、エンパワーメントのプロセスを一定程度類型化・体系化し、開発協力の関係者にフィードバックし、議論を重ねていく必要があるだろう。

6 1 定性的データと定量的データの議論再考

第1部において、持続可能な開発や人々のエンパワーメントに向けた開発のためには、ジェン

²²⁸ 国際協力事業団企画・評価部評価管理室（2002）p.15

ダー視点に立った定量的・定性的ジェンダー統計を収集し、計画立案・実施・評価に活用する必要があることを論じてきた。しかし、いくつかの議論はまだ深化される必要がある。

第1に、定量的データと定性的データの数の違いである。アンケートなどを実施すると、数百、数千という数が集まる場合もあるだろう。しかし、調査対象の数を増やしても表面的なことしか調べられないのならば、そういう調査は決して「科学的」でも「客観的」でもなく、より「一般的」な結論が得られるはずもない²²⁹。外から眺めて得た常識的な質問項目で調査にかかる例がよく見受けられるが、このような場合は対象の数がどんなに多くても「主観的」な調査にならざるを得ない²³⁰。一方、対象者数が少なくとも「深く」調べることは、同じテーマに関して何回も異なった角度から確認することも、ライフヒストリーなどの聞き取りを通じて「なぜ」、そのようなことが起きたのかといったことを検証することができ、「客観的」である。従って、数が多いと一般性があり、数が少ないと一般性がなく、妥当ではないといった議論は「対象を通して調べられること」と「対象を調べること」との混同に基づいているものなのである²³¹。開発協力計画の立案などに必要な調査とは、対象を通してどのような問題があるのかを調査することである。また、アンケートなどを用いジェンダーに関連する諸課題を明らかにしようとする場合、事前に定性的調査を行い、あらかじめ対象社会のジェンダーの諸状況を把握し、その上でその問題を検証するような質問項目を設定する必要がある。この場合もアンケートという性質上、非識字の問題などから特定層の意見に偏重することも考えられる。従って、数が多い、少ないの議論以前に、対象を通して何を調べたいのか、また、ジェンダーの諸状況を適切に把握するためにはどのような方法のデータ収集が望ましいのかが、最初に検討されるべきである。

第2に、定性的データは、客観的か主観的かという議論である。定量的データの客観性には疑義が唱えられてきたが、定性的データの場合にはどのように解釈すればよいのだろうか。第1の議論にも関連するが、定性的データはこれまで、客観的ではないと多くの人々に考えられてきた。そのため、プロジェクト実施後、対象社会の人々の中に生じてきた意識や行動変容といった質的な側面が見いだされても、記述的な説明にとどまり、これまではプロジェクトの成果として適切に評価されてこなかった。しかし、島津英世（2000）の指摘のように、たとえ自己評価であったとしても、自己を相対化することができれば、主体的「客観的」分析となるはずである²³²。

第3に、仮に客観的に定性的・定量的データが収集されてもそれらはジェンダー視点から分析・考察されているか、という点である。国際協力事業団企画・評価部評価管理室（2002）の中では定量的データと定性的データの収集と分析の必要性や、これまで社会調査やフィールド調査の基本として論じられてきたトライアングレーション²³³（三画検証。社会・ジェンダー調査のいくつかの手法を組み合わせ、複数の角度から「現実」を検討・分析する手法）の重要性が触れられている。また、PRA（participatory rural appraisal）やPLA（participatory learning action：住民主体の学習と行動による開発）の書籍も多く出版されている。しかし、田中由美子

²²⁹ 佐藤郁哉（1992）pp.98-102

²³⁰ Ibid.

²³¹ Ibid.

²³² 島津英世（2000）p.314

²³³ 佐藤郁哉（2000）pp.115-120に詳しい。

(2002)はPRAにはジェンダー視点が欠落していると指摘する。対象社会に存在する力や権力の不均衡を浮き彫りにしたり、階層や民族、性別、マイノリティなども変数に取り入れてジェンダー視点から考察することについては、今後の議論の深化が必要であろう。

第4に、客観性の問題とジェンダーに配慮したデータの分析・考察の問題が解決されたとしても、対象社会の人々の意識や行動の変容が果たしてプロジェクトの投入の結果なのか、それとも対象社会を取り巻くさまざまな外的要因の結果なのかを判断することは難しい。しかし、この点は、対象地域の人々が三角検証などの結果、プロジェクトの成果であると言及するならば、それはプロジェクトの成果として評価すべきではないだろうか(第4章参照)。また、今後はプロジェクトの合同実施といったことも国際協力事業の主流となるであろう。その場合には、プロジェクトの成果を合同で評価するようになってくるだろう。対象社会の人々にとっても似通ったプロジェクトがいくつも投入され、地域の中で交錯するよりは、国家計画や地方の開発計画の一環として実施される方が望ましい。また、昨今のわが国の経済状況の悪化と、援助予算の削減を見ると、このような効率的な援助の方策を精緻化していくことが今日、社会では求められていると考える。そこで合同評価を実施するための定性的データの蓄積が必要なのである。

6 2 PCM/PDMと対象地域における社会・ジェンダー調査の関係²³³

JICAは、プロジェクト・サイクル・マネジメント(以下、PCM)を用い、プロジェクトの効率的な運営管理を実施している。PCMとは、開発協力プロジェクトの計画立案、実施、評価の一連のプロジェクト・サイクルを、PDMというプロジェクト概要表を用い運営管理するものである²³⁴。PDMは、ロジカル・フレームワーク(以下、ログ・フレーム²³⁵)の一種であり、プロジェクトの計画、実施、モニタリング、評価を行うために使用する²³⁶。プロジェクト・サイクルの初期の段階に作成した同じログ・フレームを、モニタリングや中間評価といった見直しの作業を伴わずにプロジェクト終了時まで使い続けることは、逆に計画当初のログ・フレームが足かせとなって適切なプロジェクトの運営を妨げる要因にもなる²³⁷。しかし、この見直しの作業は容易ではなく、当初のPDMのままプロジェクトが遂行されることもあるように思われる。また、案件の発掘やプロジェクト開始初期のPDMの作成において、対象社会の社会・ジェンダーの状況を適切に把握することは時間的制約などから容易ではない。1990年代に入り開発の潮流となって

²³³ 6章は、藤掛洋子(2001d) pp. 53-59および2000年6月~2003年2月に行った「ジェンダーと開発」に関する以下の講義資料を基に精緻化したものである。JICA/IFIC専門家養成研修(2000.10、2001.6、2001.10)、JOCV広尾訓練センター(2001.9、2002.2、2002.6、2002.9、2003.2)、駒ヶ根訓練所(2001.10、2002.3、2002.6、2002.10、2003.1)、JICA職員研修(2002.2)、I/NGO:JOICEP(2002.2)、お茶の水女子大学、東京家政学院大学などにおける講義。なお、フィールド調査に関する文献は巻末に別枠を設け記した。

²³⁴ 岡田尚美・源由理子(1994) p. 105

²³⁵ ロジカル・フレームワークとは、政府開発援助政策におけるプロジェクトのプランニング、事前評価、事後評価を行うために使用する「理論的枠組み」である。この中に援助国の関係省庁、援助担当機関、援助対象国の代表などを参加させるという考え方を取り入れたものがプロジェクト・サイクル・マネジメント(PCM)である(山谷清志(1998) pp. 94-95)。

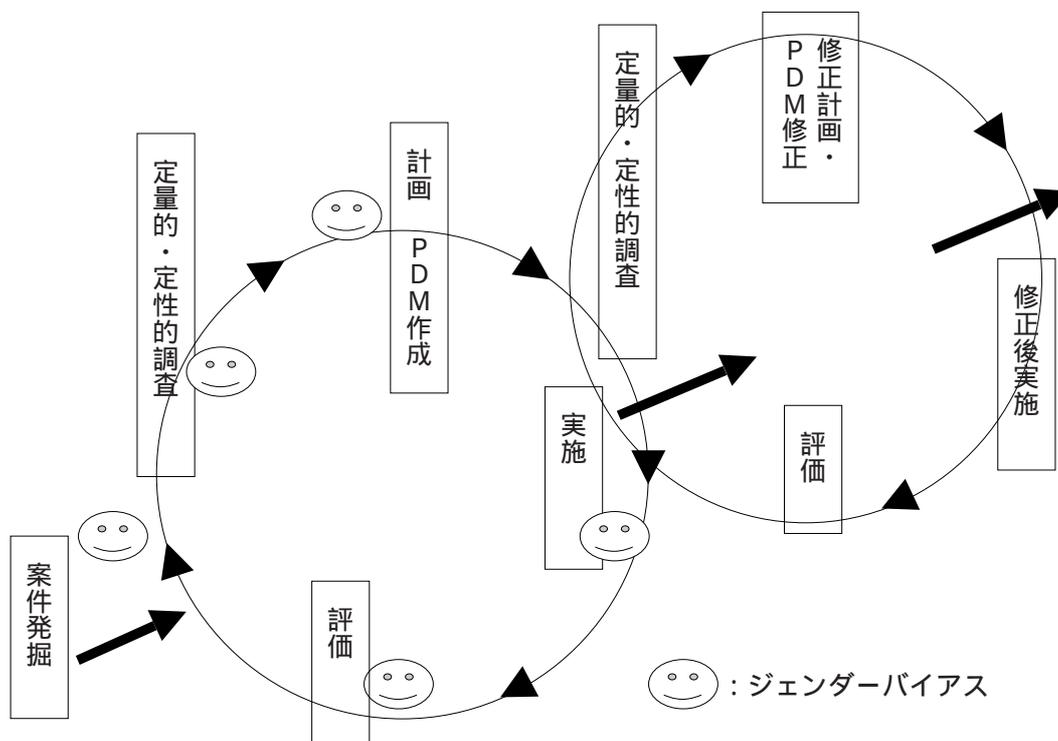
²³⁶ 国際協力事業団企画・評価部評価管理室(2002) p. 64

²³⁷ 岡田尚美・源由理子(1994) p. 108

きた「対象地域の人々を主体にした開発」を推進するためには、対象地域の人々が考える利害関心（またはニーズ）を適切に拾い上げる必要がある。そのためにも、調査者と調査協力者の間に一定程度のラポール（信頼関係）の形成がなされてデータを収集することが望ましいが、諸事情によりそれ以前の段階からプロジェクトの形成がなされることもあるだろう。本来であるならば、すべてのプロジェクトの形成段階において社会・ジェンダー調査を行うことが望ましいが、プロジェクト形成の段階で社会・ジェンダー調査が実施されていない場合でも、プロジェクトの実施過程において、定期的な社会・ジェンダー調査を行うことで、プロジェクトの修正を行うことは可能である。図6-1に示すような、定期的な社会・ジェンダー調査の実施は不可欠である。

対象社会の社会・ジェンダー構造が適切に把握され、新たな情報が入手されたならば、その段階で、PDMなどを修正することが求められる。また、次節で述べるようにどのような調査や評価の段階においても対象社会の解釈に対するバイアスを完全に除去することは不可能である（図6-1参照）であるからこそ、定期的な調査と多面的な議論、修正が必要なのである。調査の実施や収集したデータの分析には、計画策定者のみならず、対象地域の住民や対象国の政策立案者といった多様な層の人々との多くの議論による計画やプロジェクトの修正が必要なのである。

図6-1 プロジェクトサイクルにおけるジェンダーバイアスの是正



出所：藤掛洋子（2002a）

注：図5-1の再掲。

また、PDMの作成初期は、対象社会の社会・ジェンダー構造の把握が不十分であるため、プロジェクト支援者がよかれと思い、対象地域の文脈と齟齬をきたした形でPDMが作成されても、そのまま投入が行われる場合もあるだろう。また、仮に住民参加でデータの収集・分析が行われ

ていても、そもそも住民男性や女性が実際の利害関心の一部しか概念化できなかつたり、発言や説明をうまくできずに、プロジェクトの目標に上がらない場合もある。例えば、第4章の事例では、S村における住民女性の初期の利害関心は野菜栽培品種の増加や野菜料理方法の獲得であり、これらの利害関心を充足させる過程において初めて幼稚園の設置やジャム加工場の設置といった新たな実際の利害関心が認識され、言語化されてきたのである。さらにプロジェクトの実施後数年して、女性たちの戦略的利害関心である家庭内暴力への抵抗や家族計画の実施といったことが、コミュニティの課題として認識され、概念化されたのである。このような点は第3章で見てきた各国のNGOの活動事例からも同じようなプロセスの発現を見いだすことができ、一定程度の普遍化は可能であろう。つまり、これらの事例から分かることは、住民参加型の調査を一度行えばすべてよし、というものではなく、継続した調査や議論が必要なものであり、開発協力のプロセスとそのあり方が重要なのである。本論の第4章で論じた成果三類型で見いだされたように、実際の利害関心とさらなる実際の利害関心の発現のプロセスにはしばしば時間的なずれがある。さらに、実際の利害関心から戦略的利害関心への移行は1年から数年の年月を要することもある。つまり、PDMは、対象社会の人々の利害関心の発現の状況に応じて議論され、必要と認められるならば修正がされるべきなのである。また、このような利害関心のすべてが量的に示されるものではないため、定性的調査が不十分な場合はPDMの修正も不十分となり、プロジェクトが適切に計画・実施・評価されないことも多い。このような背景から、これまでも取りこぼされてきたプラスやマイナスの成果が多くある。特に、本稿の第4章で見てきたように、持続可能な開発や人々のエンパワーメントを目指した開発を行うためには、人々の意識や行動の変容をとらえることが必要であり、それらも評価の対象にされなければならないのである²³⁸。

しかし、岡田尚美・源由理子(1994)が指摘するように、PCMは、プロジェクト・サイクルを運営管理する「骨組み」を提供しているが、プロジェクト・デザインを完成するために必要な「分析手法」を示しているわけではない²³⁹。そのため、人々のエンパワーメントの状況を適切に把握するためには、本稿で論じてきたようにジェンダー視点に立った定量的・定性的なデータの入手と社会経済ジェンダー分析手法(socio-economic and gender analysis: SEGAまたはECOGEN)やPLAを用いた分析と評価、あらゆる場面へのフィードバックと議論の深化が必要なのである。

6 1で述べた第1から第4の問題が解決できても、そもそも、プロジェクト・デザイン・マトリックス(以下、PDM)(図6 2参照)のプロジェクト目標に人々のエンパワーメントなどが設定されていなければ、人々の意識や行動変容は評価の対象にもなり得ない。調査対象地域の人々との議論を踏まえてPDMの修正が行われ、人々の意識変容やエンパワーメントといったものがプロジェクトの目標等に組み込まれれば最も望ましいであろう。カイロ行動計画(1994年)や北京行動綱領(1995年)において人々のエンパワーメントの重要性や、人々のエンパワーメントのための開発協力の推進が問われており、これらは国際社会の合意事項である。また現実の社

²³⁸ 外部者が人々の意識や行動変容を評価することは倫理的な問題としても指摘され得るだろう。筆者は当事者の自己評価について藤掛洋子(2001b)で論じている。併せて参照されたい。

²³⁹ 岡田尚美・源由理子(1994)p. 105

会において、プロジェクトの実施により対象地域の人々が認識するプラスやマイナスの意識や行動変容が生じているからである。この点は3章、4章で見てきたとおりである²⁴⁰。今後は、社会開発協力プロジェクトの上位目標のみならず、プロジェクト目標に「人々のエンパワーメント」といった項目を設定することが必要になってくるであろう。このような立場に立った上で以下では、補論としてミクロレベルにおける定量的・定性的データ入手のための社会・ジェンダー調査の具体的な手法の一部を紹介する。なお、ここで紹介する手法は筆者が活用してきたものの一部であり、紙幅の関係から事例に偏りがある点はあらかじめお断りを申し上げたい。詳細な調査手法や考え方については、巻末に記したフィールドワークや調査手法に関する文献も参照されたい。

図6 2 プロジェクト・デザイン・マトリックス (PDM)

プロジェクトの要約	指標	指標入手手段	外部条件
上位目標			
プロジェクト目標			
成果			
活動	投入		前提条件

出所：http://www.jica.go.jp/evaluation/guidance/07_01.html（2003年2月20日アクセス）

* なお、PDMで示す指標は、「プロジェクトの活動、成果、プロジェクト目標、上位目標の達成度を客観的に図るものさし」とされており、ジェンダー統計の際に用いる指標とは若干定義が異なる点に留意されたい（本稿の用語説明も参照されたい）。

6 3 「わたし」のジェンダー観の相対化

プロジェクト（プログラム）の実施、評価、PDMの修正などの段階において、開発協力支援者（実務担当者）の社会・ジェンダーに関するバイアスが存在することは先に示したとおりである（図6 2参照）。というよりも、誰一人として、主観的な主体であることから逃れることはできないのである。問題は、客観性とは、本質的に主観的な認識をどうしたら客観化できるかということであり、また私たち一人一人が本質的には主観的な主体であることを自覚する必要がある²⁴¹。このような主観的な私たちの一人一人に、各人各様のジェンダー観があるのは当然であり、そのジェンダー観をすべて取り去ることをここで求めているのではない。

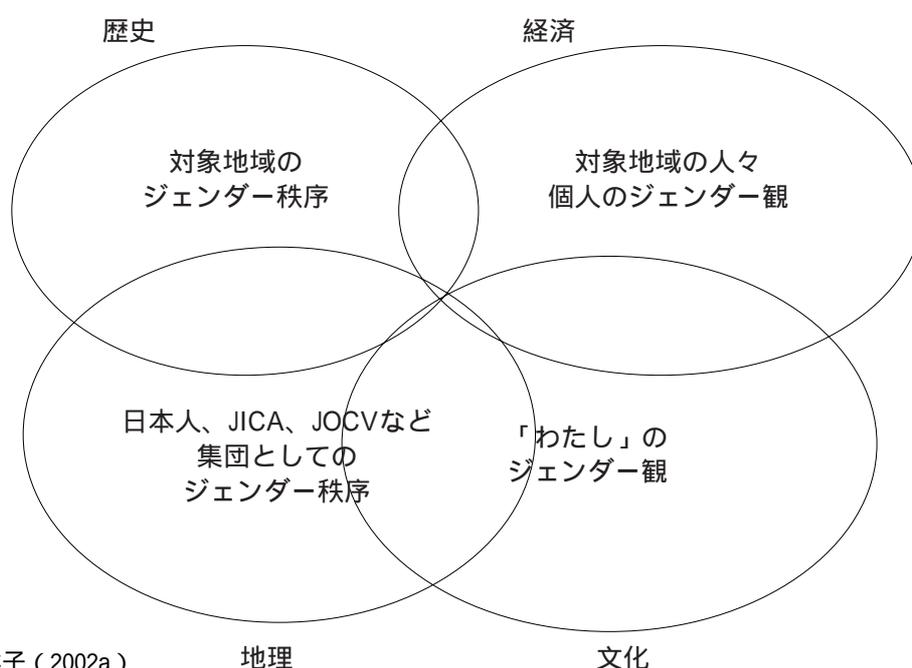
開発協力の現場で重要なことは、一人一人の「わたし」が持つジェンダー観（しばしばジェンダーバイアスでもある）を相対化しつつ、計画を立案したり、実施したり、修正したりすることである。個人のジェンダー観は、個人によりまた対象地域により、また帰属するコミュニティにより多様であることは言うまでもない。図6 3のように調査者（開発協力支援者である計画立案者、専門家、JOCV、コンサルタントなど）である「わたし」は、開発協力の場では、「日本人、

²⁴⁰ この場合、誰にとっての成果か、またどの時点での誰にとっての成果なのかによって、同じ事象がプラスかマイナスかに分かれる場合もあるだろう。従って、成果やプロジェクト目標、もしくは上位目標、指標などを設定する場合、どの時点での誰にとっての成果なのかを明記しておくことも一つの方策であろう。

²⁴¹ 夏刈康男（1995）p. 12

JICA、JOCVなどの集団としてのジェンダー秩序」や「対象地域のジェンダー秩序」「対象地域の人々の個人のジェンダー観」などに取り巻かれる形で仕事を行う。この中でジェンダーによる認識が重なり合うこともあれば、全く重ならないものもあるだろう。当然ではあるが、現実の社会のジェンダー構造をこのような単純な図式で表すことはできない。しかし、少なくとも「わたしのジェンダー観」が日常のメディアや長い歴史、国際社会や国家の経済、地理的な条件など、様々な要素と絡み合って作られ、多様な経験の中で再構築されているという意味からこの図を示した。つまり、自分自身のジェンダー観を相対化しない限り対象社会のジェンダー構造を見ることのできない場合もあるのである。

図6 3 「わたし」のジェンダー観の相対化



出所：藤掛洋子（2002a）

「わたし」と「日本人、JICA専門家、JOCV隊員」など帰属する集団などに存在するジェンダー秩序、開発協力が行われる「対象地域のジェンダー秩序」「対象地域の人々個人のジェンダー観」を示したこの4つの輪は、既述のように、開発協力の内容によって一致するものもあれば、異なるものもあるだろう。また、調査者と地域の有力者との間ではジェンダー観が一致しても、対象地域の人々と地域の有力者が同じジェンダー観を持っているとは限らない。さらに、対象地域の男性、女性、既婚女性、未婚女性、シングルマザー、都市、農村の人々、大人・子供、先住民・メスティーソ・白人、経済階層の高い人々・低い人々、一夫多妻制の社会における第1夫人・第2夫人・第3夫人などの間で見られるジェンダー観は一致するものもあれば、異なるものもあるだろう。このような差異も含めて対象社会の社会・ジェンダー構造を適切にとらえ、裨益者の利害関心やニーズの優先順位を決定し、目的や投入の内容を決めなければならない。その際には、トライアングレーションなどを用い、調査内容の妥当性を検証する必要がある。それぞれの「わたし」が自己の相対化を行い、より多くの人と議論を行うことで一定程度の「客観的」

な分析は可能となるはずである。そのためにも、多様な層からの住民参加による社会・ジェンダー調査が必要であり、さまざまな人々と議論を深める必要があるのである。

最後に、3点強調しておきたいことがある。1つは、対象地域の人々のジェンダー観や調査者のジェンダー観の可変性である²⁴²。私たちを含めて人々は対象社会の歴史や経済、地理的状况などにより多様な影響を受けている。社会の諸要因により強弱はあれ、「構築され」、そして社会を「構築してきた」ということもできよう。「構築された」という視点から見ると、メディアなどにより人々の意識が作られ、再生産されてきたことは多くのメディア研究の指摘するところである。しかし、このような構築された人々も、他者との相互作用を通じて自己を再構築、脱構築する存在である²⁴³。この点を開発協力支援者は適切にとらえていく必要があるだろう。

2つ目は、先にも触れたように、途上国の女性や農村女性、先住民といったカテゴリーでややもするとくくられてしまう人々（女性／男性／子供...）の現実の社会における多様性である²⁴⁴。開発協力を行う国の首都などの都市部に居住する高い階層に属する女性と農村の女性を、ある部分においては同列の文脈で論じることには困難があるだろう。パラグアイの農村においても、先住民の女性とメスティーソの女性を同列で論じることができないし、農村に居住する先住民アチエ人と観光地で土産物を販売し生計を立てているグアラニー人を同じ先住民としてひとくくりにして論じることにも困難が伴う。開発協力が実施される対象社会の状況を適切に把握するためには、調査者自身のジェンダー観を相対的にとらえ、対象社会のジェンダーや階層、階級、民族などの状況を見て変数を組み合わせて、分析・考察・解釈していく必要があるのである。

3つ目は、対象社会と開発プロジェクトが、グローバルな文脈の中でどのような位置付けにあるのか、意味付けられるのかを常に相対化して考える必要がある。なぜならば、グローバルな文脈の中に置かれるその位置付けによって支援の規模・内容・目的も異なってくる局面があるからである。例えば、対象国が1979年に採択された女性差別撤廃条約（Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women: CEDAW）に批准しているのか、いないのか、いつ批准したのか、批准のために国内法はどのように改正されたのかといった点も確認しておく必要があるだろう。図6-4は、「個人と社会の関係性」を示したものである。つまり個人レベルの事象であっても、国際社会や一国の政策などが密接にかかわっているものであり、また人々の社会への働きかけが直接・間接的に地方や国家の行政になんらかの変更を促しているのである。人々は、マクロレベルでは、グローバリゼーションや、国家政策、市場経済、国家的家父長制などにより、メゾレベルでは地方分権化による地域の固有の政策、権力者の意向などにより、ミクロレベルでは地域や共同体の規範・慣習、家父長制、超ミクロでは家庭内の力関係（家族やパートナー、子供、親族などとの関係）から多様な側面から影響を受け、また影響を与えつつ日々の生活を送っている。マクロから（超）ミクロまでの人々のつながりは決して分断されるものではなく、連続しているのである。特に貧困や教育、リプロダクティブ・ヘルス/ライツにか

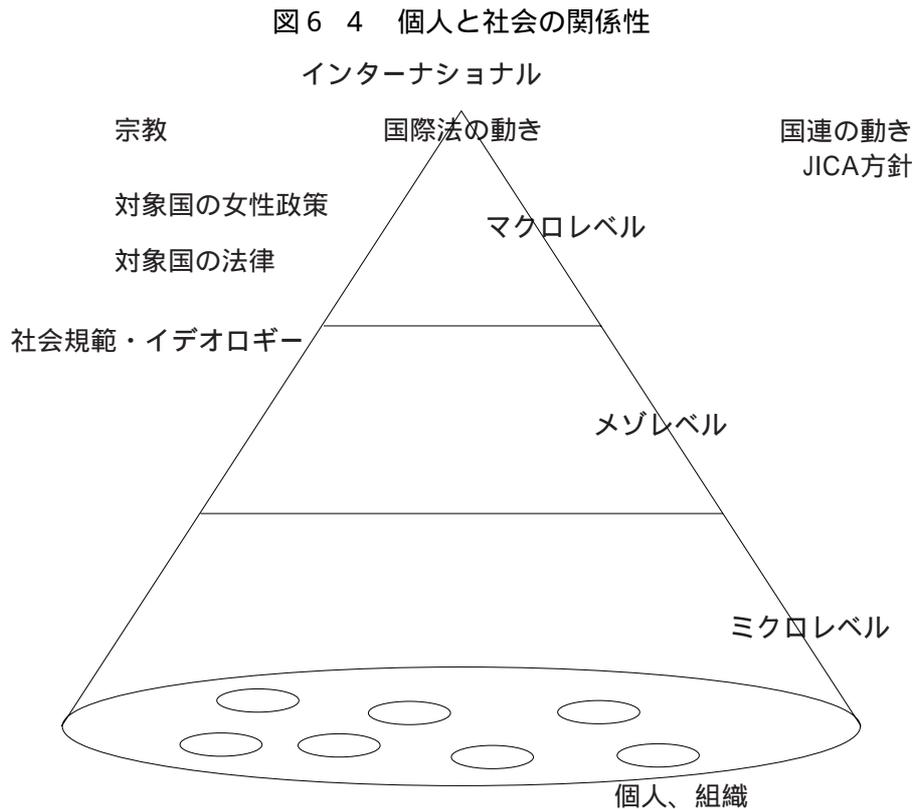
²⁴² 対象地域の人々のジェンダー観の可変性については、藤掛洋子（2003）において、文化相対主義と普遍的人権主義という切り口から論じている。

²⁴³ 藤掛洋子（2003）では、農村女性の性と生殖に関する構築と再構築（脱構築）異化の過程を論じている。

²⁴⁴ Mohanty, Chandra Talpade（1997）：藤掛洋子（2000b）など。

かわる諸問題は、このようなマクロから（超）ミクロ全般にわたるジェンダーの不均衡によっている部分が多い。

従って、調査者はプロジェクトの対象地域であるミクロレベルの人々の日常に目を向けつつ、メゾやマクロレベルにおけるさまざまな政策や市場経済をジェンダーの視点から考察する必要がある。



出所：藤掛洋子（2002a）

6 4 フィールドにおける社会・ジェンダー調査手法

それではどのような調査を行えばよいのであろうか。社会調査または社会・ジェンダー調査には多様な方法があるが、本節では開発協力の現場における社会・ジェンダー調査の方法の基本的なものの一部を紹介する。社会調査の方法は、同じものでも100人が行えば、100通りあるといわれるように、決まった型が存在しても実際の現場は多様であり、マニュアルどおりにいかないことの方が多い。また、予期せぬ課題が生じることもある。社会調査は、現場の経験を積み「技」を磨くことが重要であるといわれる所以である。また、対象社会のジェンダー構造を浮き彫りにするためには、ジェンダー視点を持つ必要があり、フィールド調査において対象社会のジェンダーの諸状況を解釈する手掛かりとして基本的なジェンダーの訓練を受けたり、文献などから地域固有のジェンダー問題を学習する必要がある。

社会調査ではなく、社会・ジェンダー調査を行うその必要性は以下のとおりである。社会・ジ

ジェンダー調査とは、ジェンダー視点を取り入れた社会調査ということができるが、通常社会調査とは異なり、民族・人種、階層、ジェンダー、マイノリティ、障害者などに関連した権力構造や力関係の不均衡な配分などに特に配慮した調査を行うことが特徴である。これはジェンダー統計にも同様のことがいえる。例えば、就学率一つをとっても、男女別の統計を取ることを基本としつつ、さらに、どのような階層、民族などの女兒、まだ男児に低い就学率が認められるのか、といった点にまで配慮していかなければならない。また、調査項目は、男性/女性、男児/女児といった二分法に加え、状況に応じて障害者、先住民などの項目を設ける必要もあるだろう。例えば、病院へのアクセスを調べる場合も、男性と女性といった基本的な調査に加えて、女兒、男児、障害者を持った男女、高齢者の男女、農村の住民(男女)、都市の住民(男女)などのいくつかの変数を設ける必要がある²⁴⁵。特定の層の人々が社会的に不利益を受けている状態(従属構造など)を適切に見いだすための調査項目(ジェンダー統計でいうところの指標)を設定し、調査することが必要なのである。これらの調査項目(や指標)は、実施されるプロジェクトや対象地域の社会・ジェンダー状況により可変的である。

社会・ジェンダー調査や分析の手法は、研究機関ではハーバード大学やサセックス大学、国連諸機関ではUNCEF、開発援助実施機関ではカナダ開発援助庁(Canadian International Development Agency: CIDA)、NGOではOXFAM(Oxford Committee for Famine Relief)などにより多く開発されている。今日のICT(Information Communication Technology)の発達により、インターネットを利用したジェンダー評価手法を議論するバーチャルな空間も存在する²⁴⁶。

6 5で述べるPLAの発展の系譜でもある迅速簡易農村調査(rapid rural appraisal: RRA)、参加型農村調査(participatory rural appraisal: PRA)と資源分析を組み合わせたSEGAは、FAOとILO、米国クラーク大学と共同で開発され、CD-ROM化されている²⁴⁷。SEGAの基本となっているPRAであるが、ジェンダー分析が不十分であるとの指摘がなされている²⁴⁸。この指摘に考慮しつつ、6 4においてジェンダーの視点に立ったPLAの具体例を示していく。

6 5 調査者の基本的な心構えと調査の範囲、調査協力者

調査者とは、先に述べたように、ここではJICA専門家やJOCV、日本人コンサルタント、カウンターパート、現地のコンサルタントなどのことを指す。調査協力者はここでは以下の人々のことを指す。第1に、プロジェクトの裨益者と想定される人々、地域や村における長、女性グループのリーダー、農協長、第2に、プロジェクトの実施に有益な情報を提供してくれるであろうリソースパーソン(Resource Person)、すなわち現地コンサルタント、地方/国家行政官、医療従事者、研究者、I/NGO'sなどの活動家、国連諸機関の職員、二国間援助にかかわる職員、近隣で

²⁴⁵ チュニジアの地方病院では患者のカルテは男女別にも集計されておらず、看護師や国家家族人口公団の地方担当官は男女別に集計する必要性を認識していなかった(藤掛洋子(2000a))。

²⁴⁶ 例えば、<http://www.apcwomen.org/gem/>など。

²⁴⁷ FAO/ILO(1997)(CD-ROM)

²⁴⁸ 田中由美子(2002)p.56

表6 1 社会・ジェンダー調査の対象範囲と深度の関係

対象の水準	対象範囲	調査協力者・グループ	調査方法例
マクロ	国家/州レベル	集団	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の(ジェンダー)統計、国勢調査、国連や各国援助実施機関などデータの活用 ・文献資料によるデータの収集・分析 ・統計家やフィールド調査の専門家への聞き取り調査(二次加工の段階での漏れなどのチェック) ・トライアングレーション
メゾ	県/市/地域レベル	サンプル集団	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の(ジェンダー)統計、国勢調査、国連や各国援助実施機関などデータの活用 ・文献資料によるデータの収集・分析 ・サンプル住民調査(標本調査*) ・個別インタビュー調査 ・トライアングレーション
ミクロ	町・村落レベル	個人、世帯、村の組織、全集落など	<ul style="list-style-type: none"> ・ベースライン調査 ・世帯調査 ・個別インタビュー調査 ・トライアングレーション

出所：国際協力事業団企画部(1997)p.48に補足・修正して筆者作成(2003年2月20日)

* 標本調査には確立的サンプリングとして、単純無作為抽出法、系統無作為抽出法、層化抽出法、クラスター抽出法などがある。非確立的サンプリングには、特定基準による選択法、スノーボウリング形式、割当式サンプリングなどがある。詳細は国際協力事業団企画・評価部評価管理室(2002)pp.128-130などを参照されたい。

活動する専門家やJOCVなどである。なお、地域や村で調査に協力してくれた人々が訓練を受けた後に調査者になることは多い。

調査対象が所属する社会階層の水準や対象範囲、調査協力者・グループ、調査方法例の目安は表6 1に示すとおりである。これらは調査の時期(事前・実施・終了時・事後など)とプロジェクトの規模や目的、対象者、期間、予算などにより異なってくる。

インタビューなどにより定性的データを収集する場合、図6 3で示したように調査者自身の「わたし」を相対化するとともに、調査協力者の年齢や性別、階級、出自などの諸属性には十分配慮すべきである。また、調査協力者が位置する社会のジェンダー規範には敏感である必要がある。例えば、イスラム教の国において男女が同席で議論をすることは困難であろうし、同性間でも目上を敬う文化があれば、年下の人々からの意見を拾い上げることは容易ではない(例：チュニジアの農村など)。詳細は6 8道具箱を参照されたい。

調査協力者は多様であることが望ましいが、都市部では仕事、年度末の繁忙期、休暇シーズン、農村部では農繁期、乾季・雨季といった調査協力者個々の事情、専門家が抱える時間的な制約、相手国や相手機関の手続きの遅れなどから、想定した調査協力者のすべてとコンタクトをとることは不可能な場合も多い。調査の遅れや調査協力者の減数を前提にしつつ、性別や年齢、経済・社会階層などの偏りを可能な限り避けるような調査協力者の設定の工夫が求められる。

6 6 調査の手順

6 6 1 対象国・対象地域の全体像の把握

派遣前に実施できることとして以下のようなものがある。今日ではインターネットの発達により当該国の国勢調査などをはじめ、各種の研究論文や報告書、多国間援助実施機関や二国間援助実施機関の調査報告書などが容易に入手できる。これらは、必要に応じて事前に入手し把握しておく必要がある。しかし、国勢調査などはジェンダー視点が欠落していることが多いため、これらを補うためにもジェンダー視点から分析された研究論文などを参照することが望ましい。また、プロジェクトに関連する国際条約があれば、当該国の批准の状況などを確認することは当該国の政策の方向性を把握する上では極めて重要である。

加えて、当該地域で多国間援助などが実施されている場合は、インターネットなどから情報を入手しておくことが望ましい。

対象国・対象地域などの現状把握

- ・国勢調査などのデータ入手、研究論文・報告書の入手、分析・解釈
- ・プロジェクトに関連すると考えられる国際条約など（女性差別撤廃条約、子供の権利条約...）
- ・プロジェクトに関連すると考えられる国内法など（労働基準法、最低賃金...）
- ・JICAや二国間、国連諸機関による関連プロジェクトの有無
関連プロジェクトがある（あった）場合は、成功例・失敗例などの経験の共有

6 6 2 対象地域における定量的データの把握

表6 1で示したように、調査の水準により入手するデータは異なってくる。収集する定量的データの出所には以下のようなものがある。

定量的データの出所

- ・詳細な国家統計（ジェンダー統計があれば望ましい）
- ・地方行政統計
- ・新聞社などが独自に実施している世論調査のデータ
- ・調査会社が実施している独自の調査データ
- ・国際援助実施機関が実施している調査データ
- ・I/NGOなどが所有しているデータ
- ・各調査機関が実施しているアンケート調査などのデータ
- ・専門家、コンサルタント、JOCVなどが実施する世帯調査、アンケートなど。

また、プロジェクトの目的によっては、以下のようなデータの入手も必要であろう。

プロジェクトの重点項目別定量的データ収集

貧困：貧困指数、貧困とされる人々の人口割合

教育：男女別・地域別（・民族・階層別）就学率、男女別・地域別（・民族・階層別）中途退学

保健（リプロダクティブ・ヘルス/ライツ）：妊産婦死亡率、乳幼児死亡率、カロリー摂取状況

労働：フォーマル、インフォーマルセクターにおける男女別就労状況、賃金格差...など

*なお、その他の統計指標に関しては1章を参照されたい。

以下では村落を事例に、基本的な定量的データの項目を挙げてみた。ただし、これらをすべて把握する必要はなく、自身の専門性や対象社会の人々が考えるニーズ、要請内容などにより適宜選択する必要がある。

村落における定量的データ

- ・対象地域の社会、文化、行政などの一般的状況（人口、世帯数、電気・上水道の有無...）
- ・地域の階層構造、村落の指導層の有無（性別、年齢なども把握）
- ・共同体組織、共同体財源管理（性別、年齢なども把握）
- ・住民の現金収入、収入源、支出状況、出稼ぎによる現金収入の有無（性別、年齢なども把握）
- ・住民の職業、出稼ぎの有無、出稼ぎの期間（性別、年齢なども把握）
- ・個人所有財産（土地、農機具、家庭電化製品...）（性別、年齢なども把握）など。

ここでの留意点としては、第1章のBox 1 10でも触れてきたように「世帯」の概念が既存の統計データの中ではどのように扱われているのか、未婚の母世帯などはどのような取り扱いがなされているのかを分析する必要がある。

6 6 3 定性的調査

定性的データには以下のようなものがある。以下では村落を事例にいくつかの事例を挙げてみた。

村落における定性的データ

- ・村落のジェンダー規範、社会規範とそれらに反した際の社会的制裁（性別、年齢などによる差異も把握）
- ・男性と女性に異なった影響を及ぼす宗教言説
- ・男性または女性にのみ課せられた婚資
- ・人工妊娠中絶の有無と社会的制裁
- ・シングルマザーの社会的地位
- ・低カースト（先住民など）の社会的地位
- ・障害者の社会的地位...など

このようなデータは「誰にでも同じように測れる」ものではないかもしれない。しかし、「測れるもの、数値で表現できるものしか客観的ではない」という議論はもはや成り立たないことはこれまで言及したとおりである。また現実には、表6 2で挙げるような諸課題が現実の社会に存在し、このような点を適切にとらえていかなければプロジェクトの成果が効率的に発現しないかもしれないのである。

ジェンダー視点に立った定性的データを入手するためには、調査者はジェンダー視点を養う必要がある。特に地域に固有のジェンダー問題なども存在するため、ジェンダー研究と地域研究、社会・ジェンダー調査の手法などを接合させる必要があるだろう。

調査者の視点が複眼的になり、より深くジェンダーの諸状況を把握できるならば、プロジェクト実施後の人々の意識や行動変容を適切に評価することが可能となる。しかし、せっかくジェンダー視点が養われ複眼的に対象社会をとらえることができるようになっても、調査時の配慮が不足していれば、入手できたかもしれない多くのデータは手元からこぼれ落ちてしまう。そこで以下では定性的データを収集する際の配慮事項を簡単に紹介した。

表6 2 調査者が配慮すべきこと

調査者	調査協力者の回答
歴史・経済・地理・ジェンダーなどの諸状況に関する推察（例：パラグアイの独裁政権の歴史、チュニジア人のフェニキア人の末裔としての誇り、ラテンアメリカのマチスモ（男性優位）思想の存在の有無...）	<ul style="list-style-type: none"> ➢ アジア人には質問されたくない、我々は誇り高き...人の末裔である。 ➢ 発言をして祖母は殺された。私は絶対に自分の意見を役人には言わない。
調査時期：雨季・乾季、収穫期（男性と女性による労働内容や時間帯の別）	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 収穫期は忙しいからゆっくりインタビューには答えられない。
訪問時間など：どの時間帯なら男性(または女性)に会えるか、子供の場合は、老人の場合は、など。	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 朝から晩まで女性は忙しいのでせめて来るなら日曜日にしておくれ。
調査時の状況（通訳の有無、通訳の性別、調査者は現地語が話せるか、豪華な4輪駆動車で乗り付けなかったか、徒歩で調査地域に行ったか、1人で村に入ったか、数人ではいったか、朝入ったか、夜入ったか、村の長に挨拶をしたか、調査者の年齢、性別など...）	<ul style="list-style-type: none"> ➢ このような時間に来られても困る。 ➢ 村長のところに行かずに直接我が家に来てくれてうれしかったが、あとで村長に何を言われるか恐ろしい。
調査者の諸属性や文化、服装、態度など	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 日本人 = アジア人だから好き、または嫌い。 ➢ JICA専門家やJOCV隊員だからきっと何か物をくれるかもしれないから少し大きさに村の問題を伝えよう。 ➢ 女性だから何もできないだろう。 ➢ 男性のくせになんで女性の集会に入ってくるのだろう。 ➢ 未婚で若いアジアの女性に私たち農民女性の苦労や喜びが分かるわけではないだろう。 ➢ 既婚なのに子供がいないなんて。 ➢ いつもサングラスをかけているから何を考えているのか分からない。 ➢ 短パンをはいて村を歩く女性は村の風紀を乱すので今後立ち入り禁止だ。
インタビュー時の発言しない、したくない、できない人への配慮	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 下層カーストだから。 ➢ 女性だから。 ➢ 農民だから。 ➢ 貧乏だから。 ➢ そばに男性がいるから。 ➢ 間違ったスペイン語を話したら恥ずかしいから ➢ 女性である「わたし」が人前で発言をしたらきっとあとで父に怒られる...

以上、筆者が直面した調査時の状況のいくつかを再現してみた。調査者が調査協力者の考える文脈を解釈し、それらに柔軟に対応しつつインタビューを進めることで対象社会のジェンダーに関連するデータをより深く拾い上げることができるようになるだろう。

さて、定性的データの収集方法は多様であるが、代表的なものとして参与観察、個別インタビュー、半構造インタビュー、KJ法、フォーカスグループ・ディスカッション、RRA、PRA、PLAなどあり、それ以外にも既述したとおり、調査・分析を主眼に置いたハーバード分析、SOCIGEN (= SEAGA)などを挙げるができる。しかし、今日、人々のエンパワーメントのために、そして調査者と調査協力者が共に学ぶという視点から用いられるのはPRAが進化したPLAと思われる。そこで、その系譜と基本的な考え方を確認した上で、具体的な手法のいくつかを紹介する。PLAの手法では、参与観察やインタビュー調査、フォーカスグループ・ディスカッションなどが包含される形になっていることは周知のとおりである。しかし、RRAは既述のとおりジェンダー視点が不足していることが指摘されている。そこで先にも述べたように、6-7以降でジェンダー視点に立ったPLAについて考えてみたい。

6-7 調査の系譜：ジェンダー視点に立ったPLAの基本的な考え方

PLAは、「住民主体の学習と行動による開発」といわれる²⁴⁹。その前身にあるRRAは、人類学の調査手法である参与観察などを基礎にして、1970年代後半から開発援助関係者の中で試行錯誤的に生み出されてきた。表6-1も併せて参照されたい。RRAは、質的なデータを短期間に効率的に収集して援助の計画や評価に取り入れ、援助の質を向上させたいという援助の現場のニーズから生まれてきたものである。その後生まれたPRAは、RRAの手法を基礎に、これらの調査を住民主体に転換しようという意図から、最初のRをP (participatory) で置き換えたことに由来する²⁵⁰。PRAが目指したことはPLAの中身と同じであるが、PRAという語は誤解を招きやすいし、手法を中心とした調査 (appraisal) だけといった印象も与えやすく、さらにこのような調査は村落のみならず都市でも実施されている²⁵¹。さらに、PRAと呼ばれていた時期における住民主体を目指した実践を経て、徐々に参加による行動と学習が備わってきて、もはや調査 (appraisal) という単語を入れておくことが現状にそぐわなくなってきた²⁵²ことから、PRAという用語はPLAに置き換えられてきている。

PLAは、人々のエンパワーメントを目的としており、これまで見過ごされてきた地域住民の潜在能力を重視し、主役は住民であり、外部者の役割はPLAのプロセスのファシリテーション (facilitation) にとどまる²⁵³。RRAとPLAの違いは、手法ではなく、住民と外部者の関係性をめぐるアプローチにある。PLAにあって、RRAにないものは相互理解、相互学習であるということがいえよう (表6-3)。

²⁴⁹ プロジェクトPLA編 (2000)

²⁵⁰ 勝間靖 (2000) p.219を参照。

²⁵¹ Ibid., p.220

²⁵² Ibid.

²⁵³ Ibid.

表6 3 PLAの発展の系譜

	目的	発展の時期	特徴
人類学的参与観察 (Participatory Observation) 大量調査	対象地域の住民から学ぶ現地主義 的で経験主義的な方法。 農村開発、ツーリズムの発展など を目的とした大規模な質問票。	1920年代に人類学者マリノフスキ ーによって確立された。 ～1970年代	数週間から数年の住み込み調査による住民の 知識の重視 ➢ 調査票の大量配布
RRA (Rapid Rural Appraisal)	データの収集、地域住民の知識 (Indigenous Knowledge) を外部 者が迅速に収集、抽出、析出。	1970～1980年代、大学を中心に発 展、1980年代には開発援助実施機 関の開発専門家によって採用され る。	住民の知識の重視 ➢ 住民の知の収集、抽出、析出、迅速 ➢ 「ボトムアップ (bottom-up)」「住民から学 ぶ」
PRA (Participatory Rural Appraisal)	データの収集、地域住民の知識 (Indigenous Knowledge) を外部 者と内部者が相互理解を通じ収 集、抽出、析出する。	1980年代後半から1990年代にかけ てNGOを中心として発展してき た。	住民の知識の重視 ➢ 相互理解
PLA (Participatory Learning Action)	ともに学ぶプロセス。	参加による行動と学習が備わり、 調査 (appraisal) という単語は 現状にそぐわなくなってきた。 PLA	住民の知識の重視 ➢ 「住民から学ぶ」から「住民とともに学ぶ」 へ ➢ 個々の住民の知恵や潜在能力を引き出すた め外部者 (開発支援者はファシリテーター になる。 ・「振る舞いと態度」 ・「分かち合い」 ・「手法」(RRAを基礎にする)
SEAGA (Socioeconomic and Gender Analysis)	ジェンダーの分析視角を取り入れ た調査手法、PLAの道具に加え、 メゾ、マクロの分析視角も加わる。	1990年代にFAO-ILO、クラーク 大学らの共同研究により開発・発 展する。	ジェンダー視点 ➢ メゾ、マクロの政策分析、提言

出所：以下の文献を基に筆者（藤掛洋子）作成（2002年2月20日）

プロジェクトPLA編（2000）：山下晋司・船曳建夫編（1997）：Chambers, Robert（1994a, 1994b）：FAO/ILO（1997）

表 6 4 PLAを支えるキー概念²⁵⁴

PLAを支えるキー概念	解説
住民の知恵	読み書き計算などの知識とは異なる類のものであり、その土地で生活する人々の知恵。男性と女性、農村の人々と都市の人々は異なった価値観を持つため、住民の知恵をそれぞれの文脈から引き出すことが重要である。
利害関係者 (stakeholder)	開発をめぐり便益を得る人がどのような属性 (性別、階層、職業) の人々であるのかを見極める。
学習プロセス	地域社会の住民と外部者とが双方向による観察や問いかけ、さらに分析を繰り返して相互理解するだけでなく、両者が互いの置かれている背景、状況、構造をも把握し共有するプロセス。
ツールの柔軟な活用	すべてのツールを使用する必要はなく、どのツールをいつ使うかが厳密に決まっているわけでもない。また、あらゆる情報を網羅、分析する必要はない。
ファシリテーション	開発の当事者及びその他の利害関係者たちの間に地域社会に根づいた開発ビジョンに向けての合意形成の場を作り出し、その具現化を促すプロセスを含む。

以上の点に複眼的な分析視角を加えることが必要になってくる。

- ジェンダーに関連する問題の所在を明らかにする。
- 多様な住民の視点に立った改善策を導き出す
- 人々の間にどのようなジェンダーの力関係の不均衡が働いているのか見極めていく。

表 6 5 PLAの基本的な考え方

PLAを支えるキー概念	解説
信頼に基づく	対象地域の人々との信頼関係 (ラポール) を構築する。しばしば、高い階層の人々と低い階層の人々の間では利害関心が相反することがある。そのため、一方でラポールを形成できても、他方からはその逆になる場合もある。誰にとってのプロジェクトなのかを対象地域の中で確認し合い、コンフリクトを除去する接点を模索する必要がある。
対話による確認のプロセス	個人や集団が持つ異なった認識を確認し、相互理解を深める、特にジェンダーにより構築された社会構造から発言できない人、発言したくない人への配慮を忘れない。
細かいことにこだわり過ぎない	文化人類学的な住み込み調査のような詳細で厳密なデータを求めるのではなく、目的に沿って情報の精度を決定する。
トライアングレーション	より多くの人々から多様な様々な手法を用いて情報を交換し、多面的に分析する。ジェンダーによる問題に敏感であること。
視覚化	議論の過程をオープンにするとともに、スケッチやシンボル、石や穀物などをを用い文字の読めない人、公用語が十分に理解できない人とも情報の共有を図る。
観察力と想像力	自身が持つ固定的なジェンダー観や「西欧」の文脈の中で培われてきた価値観から距離を置き、人々の潜在能力や対象地域の潜在的な可能性を考えてみる。

出所：宗像朗 (2000) を基に筆者作成 (2002年 2月20日)。

²⁵⁴ 山田恭稔 (2000) に藤掛洋子 (2000a、2003) を加えた。

6 8 PLAの道具箱

本項では、PLAの道具箱を見ていくこととする²⁵⁵。

(1) 観察と対話に関する道具

参与観察 : Participatory Observation
インフォーマル・インタビュー : Informal Interview/Random Interview
キー・インフォーマントへのインタビュー : Key Informant Interview
半構造グループインタビュー : Semi-structured Interview
構造インタビュー : Structured Interview
フォーカス・グループ・ディスカッション : Focus Group Discussion

(2) 空間に問する道具

地図作成 : Mapping
モデル作成 : Modeling
トランセクト (横断歩き) : Transect

(3) 時間に関する道具

タイムライン・年表作り : Time Line
日課・行動表作り : Daily Routine
季節カレンダー作り : Seasonal Calendar/Diagram
将来構造画の作成 : Vision Drawing

(4) 社会構造に関する道具

ベン相関図 : Venn Diagram
システムダイアグラム : System Diagram
フローチャート : Flow Chart
問題分析ツリー : Problem Analysis
ロールプレイ : Role Play

(5) 順序に関する道具

総当たりランキング : Pair-wise Ranking
スコアリング : Matrix Ranking
長者番付 : Wealth Ranking

²⁵⁵ 宗像朗 (2000) を基に藤掛洋子 (2000a)、FAO/ILO (1997) を追加して筆者作成 (2002年2月20日)。

(6) 社会分析に関する道具

組織分析 : Community Analysis
受益者分析 : Benefit Analysis

(7) 良好な関係の構築の道具

共同作業 : Joint Working (料理、農作業、出荷など...)
レクリエーション : Recreation (サッカー、お茶、川の管理と井戸端会議など...)
供宴 : Eating Together (クリスマス、誕生日、会議、朝食・昼食・夕食...)

(8) 二次資料の利用

航空、衛星写真、 : Aerial/Satellite Picture
政府統計、出版物、援助実施機関が実施した調査資料 : Statistics , Publication
過去の研究者や実践家の蓄積した文献や資料からの情報 : Accumulated Studies

(9) IT機器の活用

GPSなどを用いた測量、マッピングなど

出所 : 宗像朗 (2000) を基に筆者作成 (2002年2月20日)

6 9 道具の具体例

(1) 参与観察とインタビュー

参与観察とは文化人類学や社会学などのフィールド調査でしばしば用いられるものである。これは対象地域の社会に参加し観察することである。アンケート調査などを実施しても、回答が表面的になったり、おざなりな回答になることはこれまでも多く指摘されてきたところである。そのため、参与観察を行い、対象社会をより深く理解する必要がある。また、統計データを裏付けたり、統計データの問題点を確認する上でも極めて重要である。

写真 6 1 パラグアイ首都の路上



撮影 : 藤掛洋子 (2001年4月)

写真6 1はパラグアイの首都アスンシオンでのある日の午前、筆者が定点観測的に参与観察を行ったものである。ここから考えられることはいくつかある。

子供はなぜここで薬草を販売しているのか。

インフォーマルセクターで児童労働をしている。警察の取り締まりはないのか。子供たちは学校にいつ行くのか。パラグアイの学校は午前と午後の2部制である。そうであるならば午後、2人とも学校に行くのか。午後に同じ場所に戻ると、男児はいなかった。女兒に聞くと「兄は学校に行った」という。女兒は、「自分は行かなくていい」という。ここから考えられることは、女兒は学校にやらなくてもいい、というパラグアイの人々の考えがある程度普遍化できるのか。それはどのような経済階層の人に顕著に見いだされるのか。

親はいるのだろうか。親は路地裏にいた。そこでインタビューを行った。

筆者：「お子さんはいつ学校に行くのですか。」

親：「経済的に余裕がないから長男だけ行かせています。」

筆者（自問）：農村の状況と共通しており、男児に教育は優先されるのだろうか……。

筆者は警察にインタビューを行った。

筆者：「子供の労働は違法ではないのですか？」

警察：「違法です。取り締まりをしています。見つけると違反の切符を切ります。だいたい子供が働いている屋台の裏や近くに親がいますから、親に切符を切ります。しかし、見つけて切符を切っても切っても子供を働かせる親は減りません。子供が店頭に立っている方が売れることもあるからでしょうが……。」

このように参与観察とインタビューから統計には表れない児童労働とインフォーマルセクターのかかわりを見ることができ、対象社会の事象がより鮮明に浮き上がってくる。

写真6 2はパラグアイの地方都市から農村へ向かうテラロッサといわれる赤土道である。筆者がプロジェクトを支援していた時期の写真である。この道では、写真右の女性が自家製のエンパナーダ（empanada）といわれる揚げ物を籠に入れて町の市場に売りに行く途中であった。ほかの女性はカレッタ（carreta）といわれる牛車を操り、キャッサバ芋を町の市場に卸し、村に帰る途中であった。女性も市場労働にかかわっているのだと筆者は解釈をした。

写真6 2 パラグアイの農村女性



撮影：藤掛洋子（1994年10月）

農村では男性も女性も子供の農作業をしていた（写真6-3）。しかし、金銭管理に関する聞き取り調査を進めると、女性が市場で得た現金は、家長である父親や夫に渡すことが村のしきたりだった。女性たちは世帯所得の管理権を有していなかった。

写真6-4はパラグアイの農村部の典型的な藁葺き屋根の家屋である。お昼で、男性はテレレといわれるお茶を飲んでくつろいでいた。女性は何かをしているのか調べてみると、表6-6にあるように家事をしていた。女兒も写真6-5のように、家事の手伝いをしており、男児はサッカーに興じていた。このように、村における性役割分業は外部者でも明確に分かる。このような男女の性別分業や時間配分を適切に把握することが重要である。

写真6-3 農作業へ



撮影：藤掛洋子（2001年3月）

写真6-4 パラグアイの農村の家屋とテレレ（茶）を飲む男性



撮影：藤掛洋子（1997年4月）

表 6 6 マリアとペドロ夫婦と子供たちのある一日 (1997年 4月)

名前(仮名) ・時間	マリア(妻)	ペドロ(夫)	長男	次男	長女
5:00~	起床、火をおこしお湯を沸かす。マテの準備	就寝	就寝	就寝	就寝
5:30~		起床			
	夫婦でマテを飲む。				
6:00~	子供に朝食を食べさせた後、裏庭へマンディオカの収穫へ行く。	トマト畑へ	子供たちが起き出し、朝食をとり学校へ。		
7:00~	長女を幼稚園に連れて行く。帰り道にジュジョーを持ちかえる。				母と幼稚園へ。
7:30~	自宅に戻り、テレレの準備をする。				
8:00~	朝食の準備にかかる。マンディオカの皮剥き				
8:30~	トルティージャを揚げる	↓			
9:00~	夫に朝食を出し、その後自分も朝食をとる。	トマト畑から戻り朝食をとり、再びトマト畑へ。			
9:30~	食器を洗う。				
10:00~	昼食の準備				
11:00~	家庭菜園の世話				
		↓	↓	↓	↓
12:00~	↓	↓	↓	↓	↓
12:00~		トマト畑から戻る。			
12:30~	テレレ	テレレ	学校や幼稚園から戻る。		
12:50~	家族に食事をふるまい、最後に昼食をとる。	昼食をとる。			
13:00~	シエスタ(昼寝)をする。				
14:00~	テレレを飲み休憩する。		↓	↓	↓
15:00~			土間を掃く	雀と遊ぶ。	
15:30~	食器洗い	トマト畑へ			
16:00~	裏庭で洗濯、子供の世話				
16:30~	↓				
17:00~	洗濯物を干す、子供の世話	↓			
18:00~	テレレの準備	トマト畑から戻る。			
18:30~	テレレを飲む。				
19:00~		水浴び	水浴び	水浴び	母と水浴び
19:30~	長女と水浴び				
20:00~	簡単な夕食をとる。				
21:00~	就寝				

出所：調査より筆者(藤掛洋子)作成。

写真 6 5 家事を手伝う女兒



撮影：藤掛洋子（1997年4月）

以下の参与観察の状況は、筆者が1997年以降調査を継続しているパラグアイの農村の事例である²⁵⁶。

参与観察時の状況

調査期間中、村の人々は筆者に宿泊先を提供してくれたり、食事に招待してくれたりした。私は村で開催された会議や健康診断、誕生会などにはなるべく参加するように心がけ、見聞きしたものはフィールドノートに逐次記した。また、フィールドノートに記すことができなかつた場合、数字や地名など最も重要と思われる事項については、手のひらやチリ紙などにボールペンで書き込み、その後できるだけ速やかにフィールドノートに書き写した。

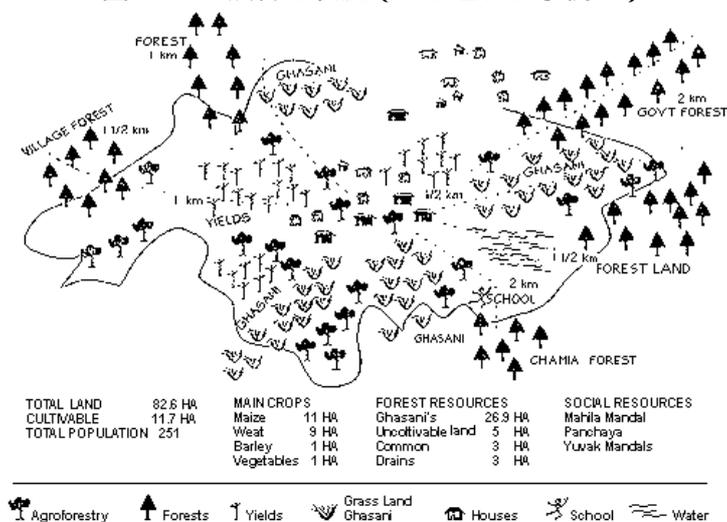
出所：藤掛洋子（2000a）p.29

（2）地図作り

村での活動を支援するためには、農村の鳥瞰図が必要である。図6 5は村の森林図である。このような図はしばしば地方行政（市役所、農牧省農業普及局、厚生省地域局など）が手書きなどで作成している場合もある。また、軍などが航空写真として所有している場合もある。時間的制約がある場合は、このような既存の地図を用い、手書きもしくは、必要であるならばArcViewなどの地図加工ソフトを用い、プロジェクトに活用することも可能である。望ましいのは村人と一緒に地図を作成することであるが、村人として忙しい。地図作りのために、調査者と一緒に時間を割いてくれる人も容易には見つからないかもしれない。そこで、既存の地図を村の集会などに持参し、村人とともに新たに加わった施設や樹木などを追加する作業などを行うことで村人の便益にもつながり、かつプロジェクト支援者が村の内部を理解することにも役立つ。また村人との関係性を作り上げるプロセスの一つにもなるであろう。加えて、そのような共同作業の過程において誰が発言をし、誰が発言をしないかなどといった、男性と女性、男性と男性、女性と女性の力の配分関係、村落内の力関係や階層構造などに関する参与観察を行うことが可能となる。

²⁵⁶ 藤掛洋子（2000a）pp.27-28

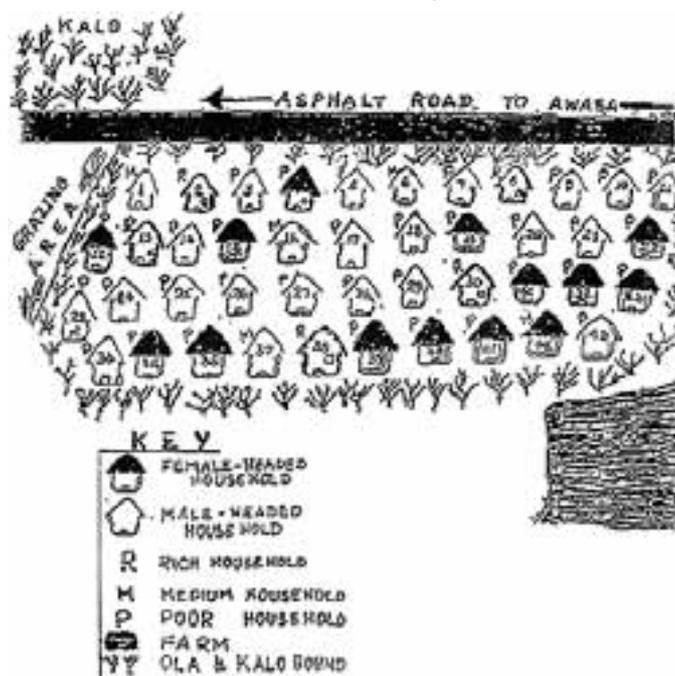
図6 5 農村の状況 (マッピング事例1)



出所 : Wilde, V.L., and A.Vainio-Mattila (1995)

図6 6 は村の世帯の貧困ランキングを表したものである。この図は黒色の屋根が女性世帯主を、白色の屋根が男性世帯主を表している。このようなマップは差別を助長するといった倫理的な問題もあり、今日作成は容易でないかもしれない。しかし、プロジェクトの裨益者となるべき人は誰か、といった村人との話し合いを通じてこのようなマップがプラスの方向で利用されるようファシリテートされればよいのではないかと思う。例えば、藁葺き屋根の家とトタン屋根の家を書き込み、屋根を修復する順番を決めるといった具合である。

図6 6 農村の社会関係の把握 (マッピング事例2)

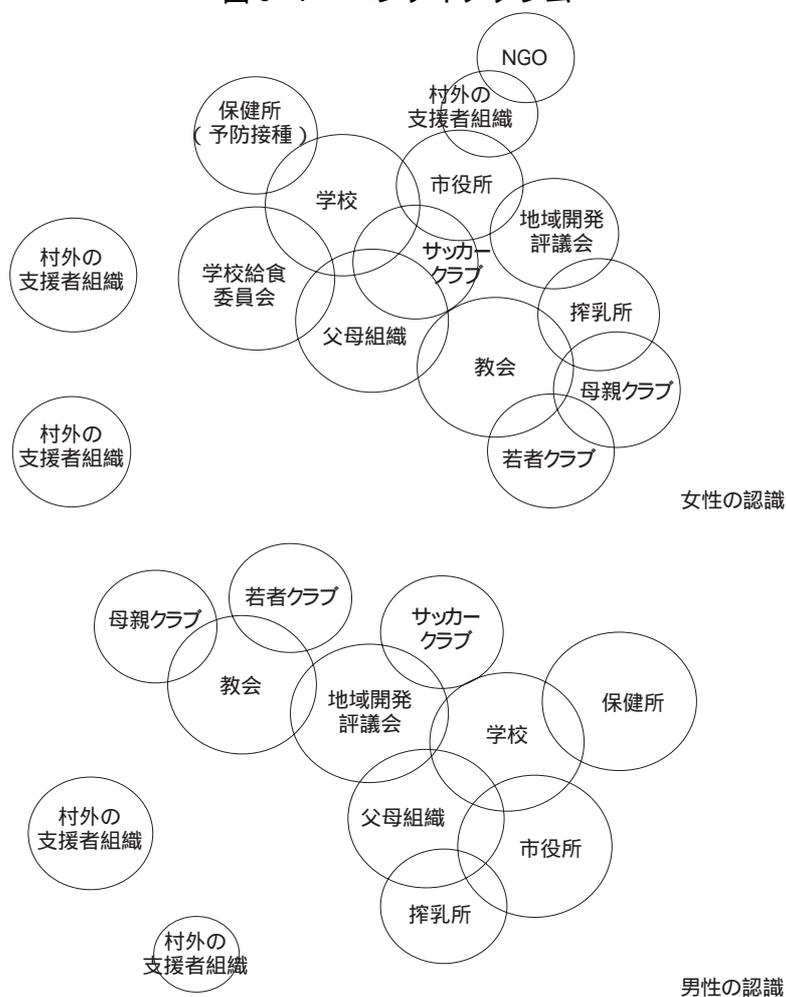


出所 : FAO/IED

Figure: A3 Tool: Village Social Maps Example: Village Social Map from Ola Ilman Galgalo Guyo, Ethiopia (Wealth Ranking on the Social Map)

図6 7はホンジュラスの農村において作成されたベンダイアグラムである。この図は村の男女が認識している空間を示したものである。村の中心に位置する診療所は、男性にとっては意識の上で近い存在であり、女性にとっては村の中で一番遠い存在であった。女性にとって一番近い存在は母親クラブである。このような調査を行うことで、男性を対象にしたプロジェクトを実施する場合、女性を対象にしたプロジェクトを実施する場合で会議や集会などの開催場所を工夫することができる。このような図は、女性個人個人で作成して、階層間における認識の差異なども導き出すこともできる。しかし、村の社会・ジェンダー規範などに配慮し、倫理的な視点を常に持つべきであろう。

図6 7 ベンダイアグラム



出所 : Urban A.M., and M. H. Rojas (1993)

(3) 時間帯調査

表6-7はパラグアイ農村の女性たちの年間の農業労働と年間行事(表6-8も参照)を調べ、男性のそれと比較することでどの時期にどのような活動を女性(男性、若者...)を対象に行うことができるのかを検討したものである。このような年間カレンダーを用い、村人間での合意形成を図ることもできる。また、開発支援者も年間の計画を立案することができるとともに、予算執行に関する計画も立てやすくなるだろう。

なお、先に示した表6-6は写真6-3、写真6-5とも関係するが、男女の労働時間帯の把握である。経済階層を高・中・低などに分類し、サンプルとして生活時間調査を行うことにより村の男女の生活時間を大まかに把握することができる。この表から、女性が朝から晩まで休みなく働くのに対し、男性はお茶を飲んだりサッカーなどのゲームをしたりする時間のあることが分かる。

このような時間帯調査の必要性は、本稿の1-3でも触れてきた。時間帯調査の蓄積のある家政学と国際協力の連携も今後考察されるべき課題であろう。

(4) 個別インタビューと参与観察

参与観察を含めてインタビュー形式や半構造インタビューなど、多様な聞き取り調査の方法がある。しかし、先述のように専門家、JOCV、日本人といった属性や性別や使用言語により生じる制約は事前に検討されるべきである。また、用いる調査手法により生じる利点・欠点を十分に検討する必要がある。個別インタビューは、個人に対し丁寧な聞き取り調査を可能とするが、ラポールの形成後ではないと問題を明らかにすることができない(例:リプロダクティブ・ヘルス/ライツや家庭内暴力など)。また、個別聞き取り調査には人数に制限があり、調査協力者の属性やデータに偏りが生じる可能性が大きくなる。

以下は、筆者が1997年から1999年までの間にパラグアイの農村で実施したインタビュー票を用いた半構造インタビューの際の状況を記したものである²⁵⁷。

テーマを特定しないインタビュー

調査協力者を訪問し、時間のあることを確認して、世間話をさせてもらった。毎回、パラグアイの習慣であるマテやテレレというお茶の招待を受けた。

調査協力者と筆者が既に顔見知りの場合は、昔話や世間話に話が弾んだ。初対面の場合は、調査協力者の性別や性格、年齢、外部者との接触の経験にもよるが、訪問の目的を告げ、庭の果樹や家畜の話、子供の話などその時々状況に応じて臨機応変に対応した。最初の訪問は、手短かに切り上げるようにし、日を改めて再度訪問する形を取るよう努めた。

スペイン語をほとんど解さなかった調査協力者の場合は、同居している世帯員に現地語のグアラニー語からスペイン語への通訳を依頼した。

出所:藤掛洋子(2000a) pp.20-26

²⁵⁷ 藤掛洋子(2000a) pp.27-28

表 6 7 S村の女性たちの年間における農業労働と年間行事との関係

	作物の種類	1月	2月	3月	4月	5月
換金作物 (*3 1)	Frutilla (苺) (*3-2)				植付け	
	Melon (メロン) (*3-3)					
	Tomate (トマト) (*3-4)		→ 収穫			育苗
	Pepino (キュウリ) (*3-5)					
	Repollo (キャベツ) (*3-6)			→ 収穫	収穫	収穫
	Zanahoria (人参) (*3-7)				植付け	
	Remolacha (甜菜)			→ 収穫	収穫	収穫
	Lechuga (レタス) (*3-8)	年中栽培				
	Sandía (西瓜)					
	Locote (ピーマン)					
	Perejil (パセリ)					
	Pimienta (トウガラシ)					
伝統的換金作物 (*4)	Algodon (綿花)		収穫	収穫	収穫	
自家消費作物 (*5 1)	Mandioca マンディオカ (キャッサバ芋)		→ 2/2-3(El día de Sanbras) (*6) 収穫			
	Maiz (トウモロコシ)					
	Poroto ポロト (インゲン豆)					
	Cebolla (玉ねぎ)					
	Oja de Cebolla (玉ねぎの葉)					
	Maní (ピーナッツ)	収穫				
	Berro (クレソン)					
	Carabaza (瓢箪かぼちゃ)					
	Zapallo (かぼちゃ) (*5-2)					
年間公式行事	1/1 Año Nuevo (元日)				4/9 Jueves Santo (聖木曜日) 4/10 Viernes Santo (聖金曜日)	5/1 Día del Trabajo (メーデー) 5/15 Día de Independencia (独立記念日)
年間行事	家庭で チバ・ソバ・チバグアス (*8) を作り食す。	2/2-3 El día de Sanbras (サン・ブラス = 聖ブラジオ = の日)			Semana Santa (聖週間。聖木曜日・聖金曜日の休みに合わせ官公庁などは水曜日の午後から日曜日まで長期休暇になる)。家庭で チバ・ソバ・チバグアス を作り食す。	

出所：筆者（藤掛洋子）の調査（1997年3月～4月、1998年4月、1998年12月～1999年3月）による。

*3 - 1：換金作物として栽培されているが形状の悪いものは家庭で食べられる。

*3 - 2：1992-1994頃、DEAGプラスガライとJOCVチームプロジェクトにより *Tufts Splendida* (学名) の栽培が推進された (国際協力事業団 1994 : 38)。

*3 - 3：1992-1994頃、DEAGプラスガライとJOCVチームプロジェクトにより *Cocumis Melo* (学名) の栽培が推進された (国際協力事業団 1994 : 61)。

*3 - 4：1992-1994頃、DEAGプラスガライとJOCVチームプロジェクトにより Junbo (果実タイプ Santa Cruz) と T7、Granduce (果実タイプ Lisas) (学名) の栽培が推進された (国際協力事業団 1994 : 13)。

*3 - 5：1992-1994頃、DEAGプラスガライとJOCVチームプロジェクトにより *Cocumis Sativus* (学名) の栽培が推進された (国際協力事業団 1994 : 71)。

*3 - 6：1992-1994頃、DEAGプラスガライとJOCVチームプロジェクトにより *Brassica Oleracea L. Var, Capitata L.* (学名) の栽培が推進された (国際協力事業団 1994 : 101)。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			→ 収穫			
			種まき・育苗			→ 収穫
植付け		→ 収穫	植付け			→
						植付け
	→ 収穫					植付け
						→
						→
						→
植付け	植付け	植付け	植付け			
	植付け					→
6/24 (El día de San Juan *7)			→ 収穫			
		苗床準備			→ 仔球の収穫	
						→
				植付け		→
						→
6/12 Día de la Paz (平和の日)			9/29 Batalla de Boqueron (ボケロン戦勝記念日)			12/8 Inmaculada Concepción (聖母無原罪の御宿りの祝日) 12/25 Navidad (クリスマス)
6/24 El día de San Juan (サン・ファン=洗礼者聖ヨハネの日) チパ・ソバ・チバグアスを焼き食す。地域では肝試しなどが行われ有名なものには火渡りなどがある。						12/8 は別名「カアクベの日」とも言われ、カアクベの大聖堂まで徒歩で参拝に訪れると健康が与えられ、病気が治ると言われている。

- *3 - 7 : 1994年「野菜消費拡大プロジェクト」(本論文第4章、4-3-2項参照)で種子が販売された。
- *3 - 8 : 1994年「野菜消費拡大プロジェクト」(本論文第4章、4-3-2項参照)で種子が販売された。
- *4 : 換金作物として栽培されている。1988年頃までの伝統的換金作物には綿花のほかに Caña de Azúcar (サトウキビ)があった。
- *5 - 1 : 自家消費用作物として栽培されているが、余剰は売りに出すこともある。
- *5 - 2 : 1994年「野菜消費拡大プロジェクト」で種子が販売された。
- *6 : 守護聖人のサン・ブラスの祝日に マンディオカ を1~2本抜いて成育具合を確認する。
- *7 : Semana Santaの チパ 用とうもろこしが豊作であるように守護聖人のSan Juanの祝日に種を蒔く。
- *8 : 熟度の異なるトウモロコシとチーズ、ラード、卵、牛乳を混ぜたものを タタクワ で焼いた伝統的な食べ物。正月、聖週間、誕生日、結婚式、クリスマス等に出される(詳細は本論文第3章、3-2-7項を参照されたい)。

表 6 8 パラグアイ共和国の年間行事

	年間の公式行事(* 1)	その他の年間行事(* 2)	備考(* 3)
1月	1/1 Año Nuevo (元旦)		
2月		2/2-3 El día de Sanbras (サン・ブラス = 聖ブラジオ = の日)	パラグアイの守護聖人、サン・ブラスの祝日に畑の マンディオカを1~2本抜いて成育具合を確認する。
3月			
4月	Jueves Santo (聖木曜日) 年によって異なる ----- Viernes Santo (聖金曜日) 年によって異なる	Semana Santa (聖週間)。 聖木曜日・聖金曜日の休みに合わせ官公庁などは水曜日の午後から日曜日まで長期休暇になる。	家庭で チパ ・ ソパ ・ チパグアス を作り食す。
5月	5/1 Día del Trabajo (メーデー) ----- 5/15 Día de Independencia (独立記念日)		農村の人々にはあまり関係のない行事。
6月	6/12 Día de la Paz (平和の日) ----- 6/24 El día de San Juan (サン・フアン = 洗礼者聖ヨハネ = の日)		農村の人々にはあまり関係のない行事。 Semana Santaの チパ 用とうもろこしが豊作であるように守護聖人のSan Juanの祝日に合わせて種を蒔く。また、家庭では チパ ・ ソパ ・ チパグアスを焼き食す。地域では肝試しなどが行われ、例えば炭を7mほど絨毯のように敷きつめ裸足でその上を渡る火渡りの行事などがある。
7月			
8月			
9月	9/29 Batalla de Boqueron (ボケロン戦勝記念日)		
10月			
11月			
12月	12/8 Inmaculada Concepción (聖母無原罪の御宿りの祝日) ----- 12/25 Navidad (クリスマス)		別名「カアクペの日」とも言われ、カアクペの大聖堂まで徒歩で参拝に訪れると健康が与えられ、病気が治ると言われている。

引用：* 1 は社団法人ラテン・アメリカ協会（1999）より。

* 2、* 3 は筆者、藤掛洋子の調査（1997.3-4、1998.4、1998.12-1999.3）による。

(5) アンケート票を用いた半構造インタビュー

パラグアイの農村では1993年当時、未婚女性調査者が既婚男性に対して調査をすることは容易ではなかった。しかし、既婚女性が既婚男性に調査をすることは村社会では受け入れ易いものだったように思われる。また、衣服にも目に見えないコードがあった。例えば、近隣の村では平和部隊の女性が短いパンツで村を闊歩したため、人々に悪い影響を与えるという理由によって村から出された。このような場合は調査どころではない。

以下は、筆者が1997年から1999年までの間にパラグアイの農村で実施したインタビュー票を用いた半構造インタビューの事例である²⁵⁸。当該地区は筆者がJOCVで活動してきた地域でもあり、ラポールは形成されていた、と自身は考えている。

アンケート票を用いた半構造インタビュー

調査協力者がスペイン語を解する場合は、基本的には筆者と調査協力者の1対1で実施するように心がけた。インタビューの内容が、村でタブーとされていた家族計画の話などに及んだ場合、ほかの世帯員などに聞かれないように配慮したためである。

最初に訪問の目的を告げ、アンケート票を用いた半構造インタビューの実施が了承された場合は、椅子をマンゴーの木の下などに運び、1対1で座れる場所を確保した。

最初にアンケート票に名前または氏名を記入してもらった。調査協力者と筆者がそれぞれアンケート票(スペイン語版)を持った場合もあれば、1セットのアンケート票を一緒に覗き込む形で見た場合、筆者のみがアンケート票を手を持った場合と、2人の座る位置や角度によって最も良いと思われる方法を選んだ。しかし、アンケート票を個人で手にした調査協力者も、内容をさっと眺めただけで、アンケート票を丁寧に読むことはほとんどなかった。

聞き取りを開始した後は、調査協力者自身が語る内容や語り口、語る順序を尊重したため、その流れに則して臨機応変にアンケート票の質問の順番を変更した。そのためアンケート票の質問の順番通りに聞き取りが進んだ例は1つもなかった。また、調査協力者の抑揚や表情などもフィールドノートまたはアンケート票に書き取り、調査協力者の許可が得られた場合はカセットテープに録音した。聞き取りの途中で、調査協力者の話が大きくそれてしまった場合は、区切りのよいと思われるところまで聞き、後にアンケート票の質問項目を利用しながら再び調査を開始した。また、アンケート票は、調査もれを防ぐための質問項目のチェックにも役立てた。時間の関係でインタビューを途中で終了しなければならなかった場合は、日時や場所を改めて調査協力者を再度訪問し、聞き取り調査を行った。

また、アンケート用コード表を筆者は常に携帯し、フィールドノートやアンケート票への記入の効率化を図った。使用したコード表は、最初の聞き取りには日本語版を用いたが、2回目以降はより効率的と思われるスペイン語版の利用に変更した。

出所：藤掛洋子(2000a) pp.20-26

(6) フォーカスグループ・ディスカッション

筆者が2000年に派遣されたチュニジアの農村部では、男女が一緒になって議論をするような習慣がないため、若者の性に対する意見を調査するためには、男女別にフォーカス・グループ・ディスカッションを行う必要があった。個別インタビューと比較すると、フォーカス・グループ・ディスカッションは、まとまった調査者の意見や傾向を短時間で得ることが可能となり効率的な

²⁵⁸ 藤掛洋子(2000a) pp.27-28

方法ではあるが、当然、モデレーター（＝カウンターパートなど）の属性や資質（話し好き、権威主義的、現地語に精通しているか否かなど）が大きく左右する。また、最も発言しない人の意見を汲み上げることは容易ではない。技術的な面については、目的に合わせてカウンターパートなどと事前に話し合いを行い（例：日本人の専門家、JOCVとカウンターパート、現地のコンサルタント、村の代表など）、試験的なフォーカスグループ・ディスカッションを行っておくことがより望ましい。

技術的な面では、例えば、どのような人々を調査協力者にするのか（性別、年齢、階層、職業、出身など）もしくは、どのような人々であれば調査に協力してくれるのか、調査協力者の人数はどの程度が望ましいのか（たくさんの協力者を得ることができた場合はどのようにグループ分けするのか、男女別、年齢別、職業別、混合...など）、また、男女が混合になる場合は、男女混合で最後まで議論を進めるのか、途中から分離するのか、もしくは男女別に進め最後に統合するのか否か、年齢や階層、地域などの差異をどのように考慮するのか、などである。これらはいくつかの場面を想定して、モデレーターと事前に話し合いがなされるべきであろう。また、調査者と調査者協力者の双方の抱える地理的・時間的制約、言語の問題なども事前に検討し考慮するべきである。

実際にフォーカスグループ・ディスカッションを始めると、状況によっては、オブザーバーであった年長者や長老などが主導的に意見を述べ始め、主役となるべきメンバーが発言をしたくても発言できなくなる場合があった。また、全く発言をしない（できない）人もしばしば存在した。そのため、どのようにすれば発言をしない人に意見を述べてもらうかについても工夫がなされるべきである。簡易問題分析ツリーなどを参加者自身に作成してもらう（写真6 6、写真6 7）など、「参加者が主体となって問題を考える」空間を演出する工夫が必要であろう。

最後に、テーマが繊細な場合は、カメラマンや政府関係者が周りにいる／いないも議論の進展に左右することが考えられる。距離を置く工夫をしたり、「重々しい雰囲気を作らない」、外部者は席を外すなど事前に話し合うなど工夫が求められる。

写真6 6 チュニア農村部における女性たちとのフォーカスグループ・ディスカッション



撮影 藤掛洋子（2000年9月）

写真6 7 チュニア農村部における男性たちとのフォーカスグループ・ディスカッション



撮影：藤掛洋子（2000年9月）

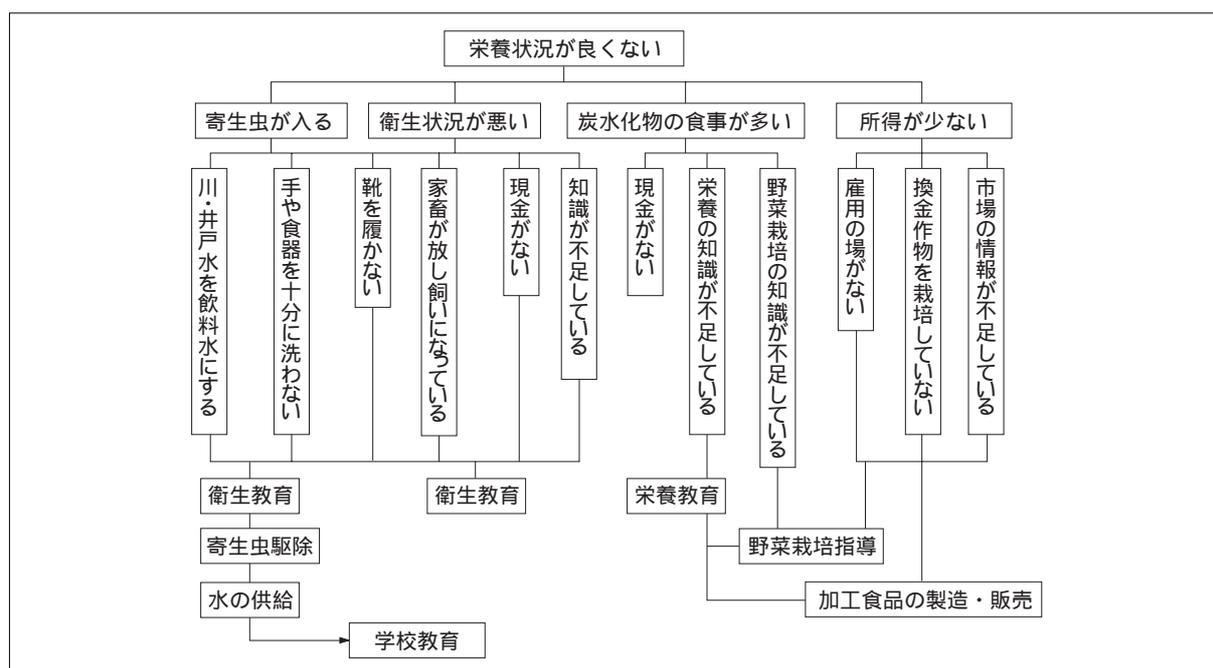
フォーカスグループ・ディスカッションで提示された人々の利害関心は分析・解釈されることが必要である。図6-8はパラグアイの農村女性が時間をかけて模造紙などを用い、女性たちが認識する村の問題を分析したものである。筆者はファシリテーターとして間に立った。

6 10 第2部総括：定性的データを活用したエンパワーメント評価

1990年代に入り、対象社会の人々を中心に据えた国際協力の重要性が問われてきた。また、カイロ行動計画（1994年）や北京行動綱領（1995年）、南の女性たちの運動などを通して人々のエンパワーメントのための国際協力の方策のあり方が求められてきた。このような流れの中、ジェンダー統計の整備をはじめ、定量的データのみならず、定性的データの収集と分析、国際協力事業への活用、また人々のエンパワーメントに向けた意識や行動変容などを評価する必要性が問われてきた。JICAにおいても、このような背景から、事業の計画・実施・評価に社会・ジェンダー調査の手法を用いて定量的・定性的データを収集・活用する必要性が議論されてきた。これらの収集方法の基本的な事項のいくつかを第6章で論じているので参照されたい。

第1部と第2部を通じ、人々のエンパワーメントを適切に評価することの重要性を指摘してきた。定性的な側面である人々のエンパワーメントを評価することは容易ではないが、本稿の第3章においてエンパワーメントという事象の一定程度の普遍性的性質が示された。このような前提に立ち、第4章で成果三類型のモデルを示してきた（図4-1、p.72参照）。このモデルの「成果一類」は、プロジェクトの直接のインプットに対する結果である。これはモリニューのいうところの実際的利害関心とその充足である。「成果二類」は、プロジェクトの開始当初、目的には

図6-8 S村の女性たちが作成した問題分析ツリー



出所：藤掛洋子（2000a）。

Box 6 1 会話をすること

調査者と調査協力者が、対象地域においてフォーカス・グループ・ディスカッションなどを用い、会話をすることというのはどのような意味があるのだろうか。心と経済の関係を論じた妙木浩之（2000）は経済学の蓄積（ストック）という用語を用い、会話を以下のように説明している。

話をやりとりすることは、心の風通しの流れをスムーズにするという側面、話をすることで整理しながら自分の物語をストックしていくという側面がある²⁵⁹。

国際協力を実施する場合に、多様な階層の人々と1つのまたはいくつかのテーマについて話し合うことで、参加者個人の考えをストックすることができ、また参加者自身も参加や参画、発言という行為の蓄積を通じて、自分の物語を体系立てて確立していくことができる。またフォーカス・グループ・ディスカッションなどを通じ多様な人々との会話と接触を持ち、地域住民のそれぞれの共通認識や齟齬を理解し合うのである。つまり、会話のストックがなされて、対象地域全体の物語がより深いものになっていくのである。このような作業を継続する中で楽しみや苦しみ、課題を共有し、これらのプロセスを経て社会変容が起きていくのである（第4章 S村の住民女性の事例も参照）。

なかったが、プロジェクトにかかわる過程で直接生じてきた「副産物的な」住民の意識や行動の変化の一部である。「成果二類」には、住民の満足感とともに、住民の中に立ち現れたさらなる実際的利害関心も含まれる。満足感は、プロジェクトのインプットに対する副産物であり、かつプロジェクトの持続可能性に重要なものである。「成果三類」は、プロジェクトにかかわることで生じた女性たちの意識や行動の変化で既存の社会の従属構造を転換するような変化である。これは戦略的利害関心の認知とその充足にあたる。

筆者は成果三類型の過程をエンパワーメントの過程と結論付けた。今後、国際協力が対象社会の人々のエンパワーメントを目指した事業を実施するならば、本稿で明らかになったようなエンパワーメントの諸側面を適切にとらえていかなければならない。具体的には本稿で示したようなエンパワーメント指標を用いて事業の評価を行うことが有効であろう。

女性グループの「エンパワーメント指標」²⁶⁰

ア．参画・参加した、イ．発言した、ウ．意識が変化した、エ．行動した、オ．連帯した、カ．協力した、キ．創造した、ク．新たな目標を持った、ケ．交渉した、コ．満足した、サ．自信を持った、シ．運営・資金管理を行った、である。

これらはプロジェクトの内容や目的によって、また事前の社会・ジェンダー調査により得られたデータにより補足・修正されるべきであるが、このような質的な側面の変容をプロジェクトレベルで測定していくことが今後必要であろう。また、これらのデータはアーカイブなどに蓄積されることを通じ体系化を図ることにより、近い将来においてエンパワーメントという切り口から施策評価や政策評価を行うことが可能となるだろう。また、アーカイブの充実とデータの体系化、類型化を通じ、地域比較や国際比較、さらには他国の援助実施機関との比較評価なども可能となるだろう。なによりもエンパワーメントは対象社会の人々の主体的な意識変革により生じるもの

²⁵⁹ 妙木浩之（2000）pp. 141-142

²⁶⁰ 藤掛洋子（2000a）pp.153-157および分析資料表7 1、7 2、7 3、図7 1、7 2、7 3を参照。

である。小さな意識の変容でも4章で確認してきたように、人々や社会の変容をもたらし、ミクロレベルのみならず、マクロレベルにまで働きかけが行われ、社会変革の端を発すものである。国際協力事業を社会変革の装置とするならば、社会・ジェンダー調査やPCM/PDM、エンパワーメント評価などは装置の中で機能する重要なそれぞれの道具である。これらの一つ一つを充実させ、議論の俎上に載せ、精緻化することは、JICAが目指す住民を主体に据えたより質の高い国際協力の推進につながるのではないだろうか。

資料：第2部 社会・ジェンダー調査ワークショップキットの紹介

第2部においてジェンダー視点に立ったPLAの工具箱と考え方を紹介してきた。筆者は2000年よりJICA専門家派遣前研修やJOCV隊派遣前研修²⁶¹、I/NGOにおける講義、大学において「ジェンダーと開発」やジェンダー視点に立った調査手法の講義を行ってきた。調査方法についてはワークショップを行っている。それぞれの講義の対象者によってさまざまなワークショップキットを作成しているが、以下に事例として示すものはJOCV広尾訓練センターの派遣前研修で行っている事例の一部である。JOCV隊員候補生の職種や派遣国に合わせて毎回修正を行うか、全く異なる場面設定を用いている。以下に示す4つの場面設定の事例は2003年6月2日に実施したものである。

これらは、以下に示すように調査者のそれぞれがかかわりを持つであろう活動の内容により適宜変更していただき、独自のワークショップを行っていただければ幸いである。

変更部分の事例

水準：国際レベルでは、国連諸機関や二国間援助実施機関との連携

マクロレベルでは、本庁派遣、I/NGO、NGO（個別・プロジェクト）

メゾレベルでは、地方行政派遣、I/NGO、NGO（個別・プロジェクト）

ミクロレベルでは、I/NGO、NGOとの連携、地域住民との草の根レベルの連携など

調査の目的：事前調査、中間評価のための調査、終了時評価のための調査、事後評価など

協力の内容1：政策レベルの協力、施策レベルの協力、プロジェクトレベルの協力など

協力の内容2：保健・医療、農林水産、人的資源、計画・行政、鉱工業など

調査者：個人、複数の日本人JOCV/専門家、相手国との合同、多国間、村人との連携など

以上の点を適宜変更し、本稿の第1部で考察してきたジェンダー統計や指標、第2部で取り扱ったPLAの工具箱を用いつつ、対象地域の社会・ジェンダー構造の把握のためのワークショップなどに挑戦していただければと思う。また、事前調査や中間評価、終了時評価、事後評価などにおいて現地の学生やコンサルタントなどを短期的に雇用し、調査データの収集に当たる場合もあるだろう。その場合、ジェンダーの議論や調査手法を示すとともに、以下で示すワークショップを行うことで調査時の姿勢に大きな変化が見られることも少なくない。また、カウンターパートや調査協力者と調査手法のツールのメリット・デメリットを議論し、農村のキーパーソンに伝授することも場合によっては必要である。ここで示したワークショップキットの事例もさまざまな人々の間で議論・批判され、ジェンダー視点に立った調査の手法が豊かになっていききっかけになれば幸いである。

²⁶¹ 広尾訓練センターと駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の「ジェンダーと開発」及び「ジェンダー視点に立った調査手法」の講義は2001年9月より担当している。

ワークショップ

場面設定 1

医療隊員（女性）として、南米X国の地方都市の病院に派遣され6ヵ月が経過しました。活動に慣れてくると、農村部における若い女性や既婚女性の望まない妊娠の多さが目につきます。X国はカトリック国であり、中絶が違法です。そのため、望まない妊娠を中断するために、女性たちは闇中絶に走り、合併症や出血多量を起こし、命を落としそうになり病院に運ばれてきます。あなたは、望まない妊娠を防ぐためのプログラムを実施したいと考えました。

障 壁

- カウンターパートや同僚たちは農村部での活動に興味を示しません。
- あなたは、公用語はできますが、現地語はほとんどできません。
- 農村部の男性は、ラテンアメリカに特徴的な マチスモ（男性優位）思想が強く、避妊に協力的ではありません。
- カトリックの影響が強く、女性たちは「家族計画」という言葉すら口にすることができません。

PLAの道具を用いて女性たちの望まない妊娠の状況を人々と一緒に考えてみたいと思っています。「観察と対話に関する道具」を必ず1つは使い、ほかの道具と組み合わせて具体的な調査の手順をPLAのキー概念に沿って考えてください。

また、PLAを実施する上での留意点についても話し合い、併せて発表してください。

出所：藤掛洋子（2000～2003）

ワークショップ

場面設定 2

村落開発普及員（男性）としてイスラム教国Y国農業省に派遣され1ヵ月が経過しました。年間の巡回プログラムを作るため、都市部、農村部の若い世代の男女に意見を聞きたいと考えています。しかし、イスラムの戒律が厳しく、若い女性たちと接触することは容易ではありません。なんとか会えても恥ずかしがってもしじめるばかりです。また、農村部の女性たちは農作業に従事することを家族から求められ、義務教育も十分に終えていないため、公用語が上手に話せません。

障 壁

- カウンターパートや同僚たちは、地方の若者の意見などを聞く必要はないといいます。カウンターパートには、農村に出向く旅費や日当が十分に支給されないこともあなたの活動に反対する一つの理由のようです。
- あなたは、公用語はできますが、現地語がほとんどできません。
- 地方に行くためには配属先とJICA/JOCV事務所での面倒な手続きが必要です。

PLAの道具を用いて、女性たちの意見を聞きたいと思っています。「時間に関する道具」を必ず1つは使い、ほかの道具と組み合わせて具体的な調査の手順をPLAのキー概念に沿って考えてください。

また、PLAを実施する場合の留意点についても話し合い、併せて発表してください。

出所：藤掛洋子（2000～2003）

ワークショップ

場面設定 3

あなたは体育隊員として、南米のカトリック国Q国の都市部に派遣され、活動期間が1年を経過しました。あなたの活動を聞きつけた近郊農村の学校から、スポーツ指導をして欲しいと依頼されました。担当地区ではありません。また、農村部ですので公用語があまり通じません。しかし、あなたは支援してみたいと考えました。

障 壁

- 公用語での議論はできるようになりましたが、現地語はまた片言程度しか話せません。
- 担当地区ではないため、配属先が協力的ではありません。
- 村ではマチスモ（男性優位）思想が強く、女の子が家から出ることをよとしていません。
- 隣村といっても交通事情が悪く、30km程の赤土道をあなた自身がバイクで抜けるなど、かなりの努力と忍耐と工夫が求められます。

PLAの道具を用いて、女性たちの意見を聞きたいと思っています。「順序に関する道具」を必ず1つは使い、他の道具と組み合わせて具体的な調査の手順をPLAのキー概念に沿って考えてください。また、PLAを実施する場合の留意点についても話し合い、併せて発表してください。

出所：藤掛洋子（2000～2003）

ワークショップ

場面設定 4

あなたは、東欧Z国に青少年活動の隊員として派遣されました。Z国での生活に慣れてくると「略奪婚」という因習があり、裕福な男性は気に入った女性を略奪し、婚姻することができる、ということが分かりました。男性のもとから逃げ出そうとすると女性は暴力を受けることも多いと分かりました。しかし、女性たちは病院にも、地域のサポートセンターにもなかなか現れません。あなたは、このような女性たちにどのようなサポートができるのかを考えています。また、小さな頃から「Noという権利」について教えていく必要があると、カウンターパートとともに話し合っています。

障 壁

- イスラム教では、女性と男性が自由に話すことが容易ではありません。
- 略奪婚について、社会は特に悪いこととは考えていないようです。

PLAの道具を用いて、地域の医療従事者やコミュニティセンターの職員の意見を聞きたいと思っています。「空間に関する道具」を必ず1つは使い、ほかの道具と組み合わせて具体的な調査の手順をPLAのキー概念に沿って考えてください。

また、被害に遭った女性（または男性）から意見を聞く場合に、どのような点に留意すべきかも考えて、併せて発表してください。

出所：藤掛洋子（2000～2003）